

## 狭山市立狭山台小学校 学校課題研究 まとめ

### 研究構想と経過

### 研究主題について

#### I 主題設定にあたって

##### 1 児童の実態から

本校児童は、明るく素直で、子どもらしい児童が多く、長期にわたり登校に課題がある児童がいるものの、学校での活動や学ぶことが好きな児童が多い。学習面では、基礎的・基本的な学習内容は定着しつつあるが学習したことを生かして、課題を解決する力としての活用力に課題がある。一方、自ら課題を見つけたり、進んで課題の解決に向かう取組を生み出したりすることが苦手である。また、音声言語による表現力が乏しく、よく考えているがコミュニケーションによって、学んだことを深めることができていない児童が多い。これらの課題を改善することは、本校児童の学力向上に関して大きな効果をもたらす。

##### 2 教育課程実施上の課題から

令和2年度から新しい学習指導要領が全面实施される。今回の改訂にあたって以下の4点が中心的なポイントとして考えられる。

###### ①「社会に開かれた教育課程実現」の視点から

よりよい学校教育を通してよりよい社会を創ることが大切であるので、教科指導の中で「読む」「聞く」「話す」「書く」の要をなす国語科の指導は重要であるといえる。

###### ②「目指す資質・能力を3つの柱として整理して育成していく」の視点から

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」をそれぞれの教科で取り組むことはもちろんであるが、各教科の横断的な視点でこの3点に取り組むことは学習指導に大きな成果をもたらすと考えられる。

###### ③「学校全体で取り組む教育活動の質の向上」の視点から

教科横断的な視点での取組を生かして学校教育目標に沿った総合的な学習の時間の設定を進めるためにも各教科領域で培った力を生かした学習内容にしていくことが望ましい。また、教育課程の実施状況の評価を通じた改善は、自校の実態をつかみ絶えず改善していく取組が重要である。あわせて、教育課程実施に必要な人的・物的体制の確保、改善を図り、学びの環境を整えていくことが、より多くの機会を学びに生かすために必要である。

###### ④「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」として

質の高い学びを通して生涯にわたって能動的に学び続けられるようにするために、確かな学力の定着が必要である。これは、各授業で基礎基本の定着とともにそれを繰り返し活用することを通してそれらの質を高めることへの取組が求められる。

以上の①～④について共通理解をもって同じ歩調で教育課程の充実を図っていくことが本校児童の学びに向かう主体的な態度を育てていくことにつながる。

### 3 教師の願い

本校の職員からは、教育課程実施上の課題を実際に取り組んでいる児童の姿から以下の点を重視し、日々の授業を進めていくことが、児童に育てたい資質能力をつけることにつながるのと共通理解に至った。

#### (1) 視点1 (生きて働く知識・技能の習得) から

全体的に学んだことの定着には時間が必要である。個々のやりとりや小グループの学びは、知識・理解や技能の定着を進めたり、習得したことをより高め、多くの共通した視点で活用しようとしたりできる。本校児童には、ドリル学習やプリント学習への取組はできているが、学習したことを活用することで内容をより深める学びの場が必要である。

#### (2) 視点2 (思考力・判断力・表現力の育成) から

コミュニケーション能力は身につけているが、その力を自ら使って課題を解決したり、情報交換を通して新たな情報を付け加えより確かなものにしたりする力が必要である。そのために、「互いを考えて発言する力」や「相手を意識して学び合う力」については、指導や取組が必要である。

#### (3) 視点3 (学びに向かう力、人間性の涵養) から

良いものを学びたいと思いを持っている児童は多い。しかし、良いものを高めて「確かなもの」としていく意欲や粘り強さを発揮している児童をさらに育てていかなければならない。

## II 研究主題

### 1 研究主題

Iの「主題設定にあたって」を受けて今年度の研究主題を次のようにしたい。

### 主体的に学びに向かう台小っ子の育成

～知識の理解の質を高め、確かな学力を育てる「伝え合い、学び合う」授業づくり～

### 2 主題設定の理由

本校の児童は、素直であり、教師に寄せる信頼も厚い。狭山台小学校の先生方は、自分たちにわかりやすく授業を教えてくれると感じていることが学校評価の中でも明らかとなっている。併せて教師と児童の人間関係も良い。

しかしながら、学力調査等の結果から見える学力が伸び悩んでいるのは、学びに対して受け身であることや授業の中でわかったつもりになっていることを自ら高めたり、深めたりしようとしなないことが原因にあると考えられる。このことには、家庭の教育力が児童に及んでいる部分が少ないことにもよる。

そこで、学びを主体的に切り開いていくことができる子供たちを育てることが重要である。そのためには、理解の質を高めるために学びの情報を増やす技能や思考力、判断力、表現力を身に付けさせることが必要である。そして、「伝え合い、学び合う」授業をすすめ、学び続けることの喜びを実感させることを

通して、一人一人の確かな学力を育てていきたい。児童がやらされる学習から、自らを見つめ学ぶことが大切であるという思いをどの児童にも持たせたい。

### III 研究としての取組

- 1 研究対象教科 国語科等
- 2 新しい学習指導要領で国語科が重視する内容

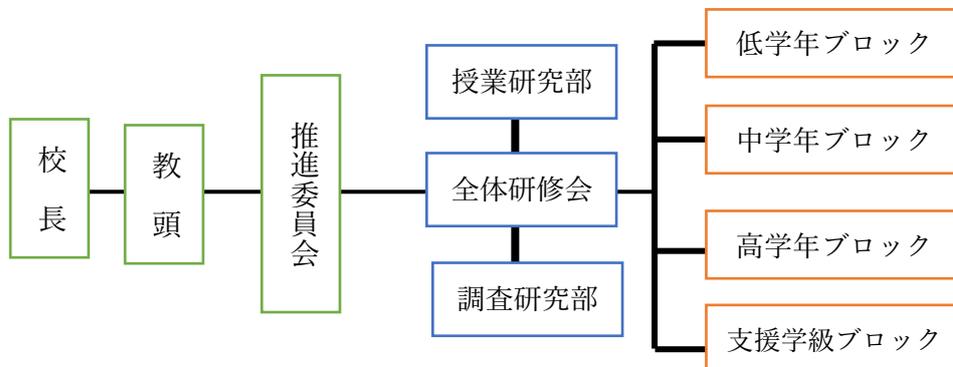
新しい学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の明確化が求められている。育成すべき能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」としている。これまでの国語科では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3つの領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成していた内容を<知識及び技能><思考力・判断力・表現力等>に構成し直した。また、学習内等については、以下の5点の視点が示されている。

- ①語彙指導の改善・充実
  - ②情報の扱い方に関する指導の改善・充実
  - ③学習過程の明確化、「考え方の形成」の重視
  - ④我が国の言語文化に関する指導の改善・充実
  - ⑤漢字指導の改善・充実
- また、様々な視点からの児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善も求められている。

### IV 研究組織と研究仮説・方針

- 1 研究組織

研究組織を以下のようにする。



- 2 研究仮説

#### <仮説1>

話や文章に含まれている情報と情報との様々な関係を適切にとらえて、思考力や判断力、表現力などをはたらかせていけば、児童の知識・理解の質を高めることができ、主体的に学びに向かう児童を育てることができるだろう。

#### <仮説2>

取り出した情報について、整理の仕方、比較・分類の仕方、メモや記録の仕方、引用などの仕方を知り、必要な語句やキーワードを適切に使って相手に伝えることができれば、授業を通しての児童の「伝え合い、学び合う」力が高まるであろう。

3 研究の方針

新設された〔知識及び技能〕(2)「情報の扱い方に関する事項」の内容を中心にして研究を行う。

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
情報と情報との関係	ア 共通, 相違, 事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。	ア 考えとそれを支える理由や事例, 全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。	ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。
情報の整理		イ 比較や分類の仕方, 必要な語句などの書き留め方, 引用の仕方や出典の示し方, 辞書や事典の使い方を理解し使うこと。	イ 情報と情報との関係付けの仕方, 図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

『小学校学習指導要領解説 国語編』P24より

あわせて、本校で検討した「考えるときに使おう」(低・中・高学年版)

<p>かんがえるときに つかおう</p> <p>○おなじところ ○ちがうところ ○じゅんばん ○だいじなこと</p>	<p>考えるときに使おう</p> <p>○同じところ ○ちがうところ ○じゅんばん ○だいじなこと ○全体と中心 ○考えと理由・事れい</p>	<p>考えるときに使おう</p> <p>○同じ点(共通点) ○異なる点(相違点) ○順序 ○考えと理由・事例 ○全体 <small>(全体として使おうとしていること)</small> 中心 <small>(その中でも中心となること)</small> ○原因と結果</p>
--	---	---

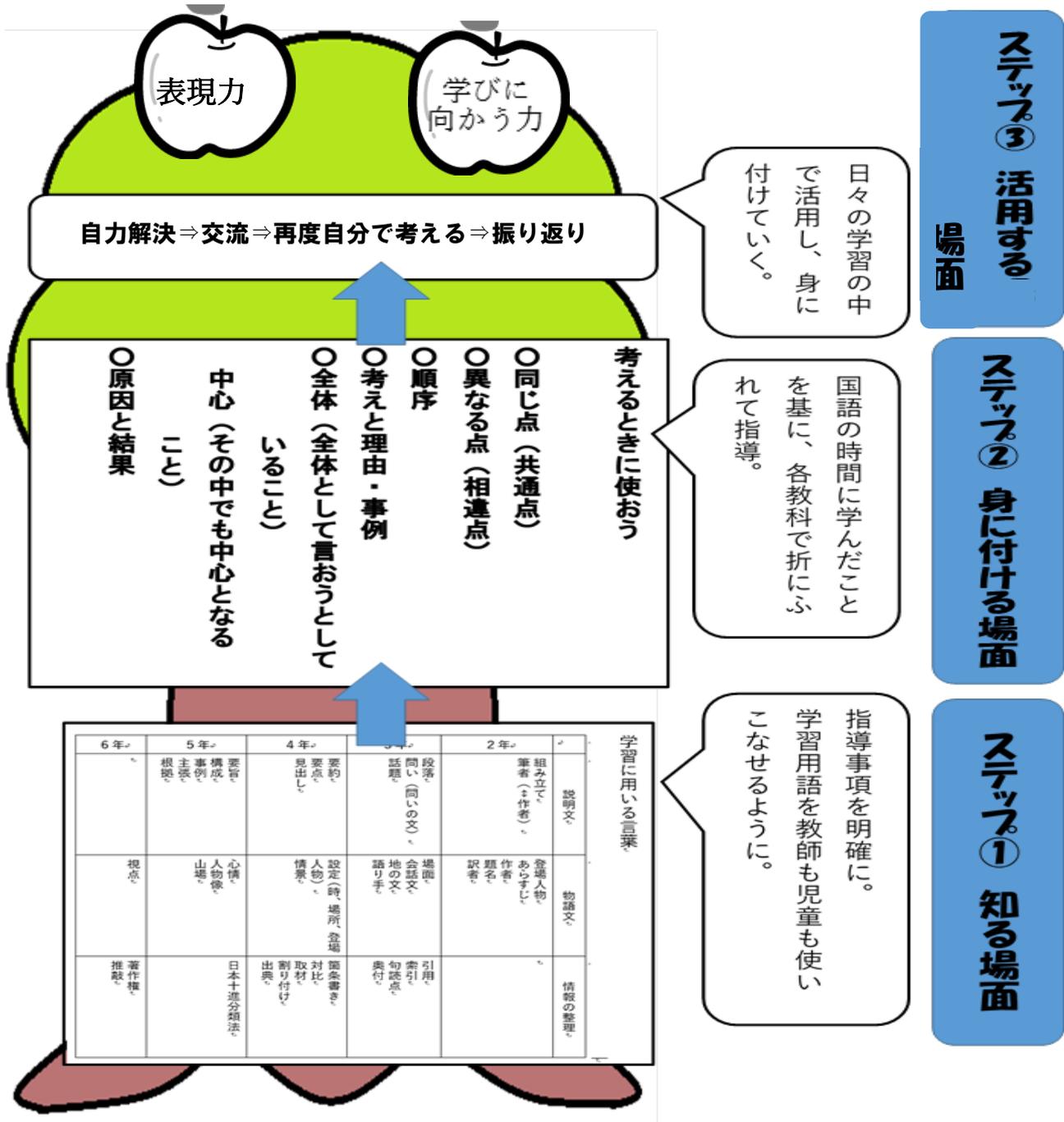
(低学年・けやき1組)

(中学年・けやき2組)

(高学年・けやき3組)

4 研究構想

(1) 研究構想図



(2) 全体として取り組むこと

- ①学習指導要領や学習用語の系統表を基に、指導事項を明確にした指導をする。
- ②学習用語を適切に使って授業をする。(教師も児童も)
- ③学習計画を示し、児童が見通しをもって学習活動に取り組めるようにする。
- ④説明文教材では、全文シートを活用する。  
(問い：青、答え：赤、接続語やキーワード：緑やオレンジ 等)
- ⑤どの教科も「めあて・課題→自力解決(学習活動)→まとめ→振り返り」の流れでの指導を心がける。  
その際、自力解決では、「考えるときに使おう」の視点を活用する。  
※各教科での学習が「総合的な学習の時間」「生活科」等の探究的活動に結びつくことがゴールです。

## 研究の仮説と手立て

### 【仮説1】

話や文章に含まれている情報と情報との様々な関係を適切にとらえて、思考力や判断力、表現力などをはたらかせていけば、児童の知識・理解の質を高めることができ、主体的に学びに向かう児童を育てることができるだろう。

- I 情報を正しく理解したり深めたりするために音読指導をする。
- II 情報を整理し見通しを持って学習に取り組むことができるよう、板書を工夫する。
- III 全員が自分の学習経験や生活経験を生かして考えられるような学習活動の設定をする。
- IV 既習事項を生かし、児童自らが課題を設定し、問題解決していく場を設定する。
- V 学習の中で必要となる多様な語句を取り上げ、言語環境を豊かにする掲示を工夫する。
- VI 児童が、学習した内容や考えの変容を振り返り、次につなげられる振り返りシートを活用する。
- VII 単元づくりの手順を通して、単元の目標からゴールを設定し情報と情報の関係を捉える授業づくりをする。
- VIII 狭山市学力向上“茶レンジ・プラン”を位置付ける。

### 【仮説2】

取り出した情報について、整理の仕方、比較・分類の仕方、メモや記録の仕方、引用などの仕方を知り、必要な語句やキーワードを適切に使って相手に伝えることができれば、授業を通しての児童の「伝え合い、学び合う」力が高まるであろう。

- I 文章を構造的に捉えたり、内容を整理して捉えたりすることができるよう全文シート・本文シートを活用する。
- II 児童が考えるときに活用する視点を示し、適切に語句を使えるようにする。
- III 情報の整理の仕方を具体的に指導し、必要な情報を取り出せるようにする。

## 授業研究部・調査研究部の取組

### 情報を正しく理解したり深めたりするために音読指導をする。

情報を正しく理解したり深めたりするために、音読指導を行っていく。「小学校学習指導要領解説 国語編」では、音読の機能について「音読には、自分が理解しているかどうかを確かめたり深めたりする働きがある」とまとめている。また、音読は「知識・技能」として位置づけられ、より基礎的な事項として意義づけられている。「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」文部科学省答申には『音読することによって、漢字の読みを覚えたり、文章の内容を確実に理解したりできる。』のように示されている。これらのことを踏まえ、音読は正しく理解する基礎であり、音読を通して①文字（平仮名・漢字）が読める②言葉のまとまりとして読める③文章のまとまりとして読める④意味のまとまりとして読める効果があると考えられる。音読には「読む力を養う側面」と「表現力・感覚面を養う側面」があるが、「読む力を養う側面」は子供の読解力にかかわる大きな意義がある。音読を通して教材を正しく読み取り、情報をとらえていけるようにする。

#### 考える 音読カード「こまを楽しむ」①

問いの文 立ち読み 問いの文は 立って読みましょう。



こまを回して遊ぶことは、むかしから世界で、行われてきました。

立ち読みは、読む力があっても、立ち読みができません。

立ち読みは、読む力があっても、立ち読みができません。

#### 考える 音読カード「言葉で遊ぼう」②

どのようなもの どのような楽しさ 首ふりよみ

「どのようなもの」が書いてある文は、右をむいて、「どのような楽しさ」が書いてある文は、左をむいて、首振りよみ、楽しんでください。



首振りよみは、読む力があっても、首振りよみできません。

首振りよみは、読む力があっても、首振りよみできません。

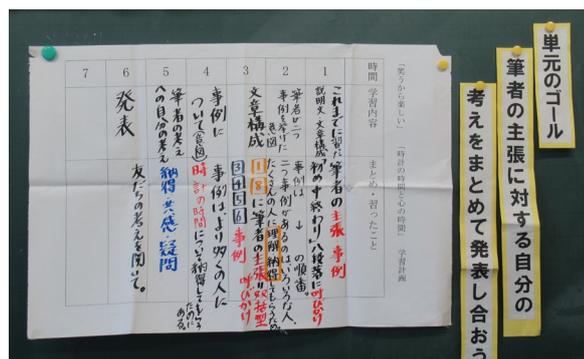
### 情報を整理し見通しをもって学習に取り組むことができるよう、板書を工夫する。

全ての児童が主体的に授業に参加するためには、必要な情報を取り出したり教師の発問を十分に理解したりする必要がある。そのために、板書の仕方や教材の提示の仕方を工夫していく。板書では、板書の順番やチョークの色等を工夫し、「今、何を学習し、何に取り組まなければならないのか」、「今日の学習の大切なことは何なのか」、等が一目で分かるようにしていく。また、必要な情報や学びの過程を板書で可視化することで文章の読み方を身につけていけるようにしていく。



### 既習事項を生かし、問題解決していく場を設定する。

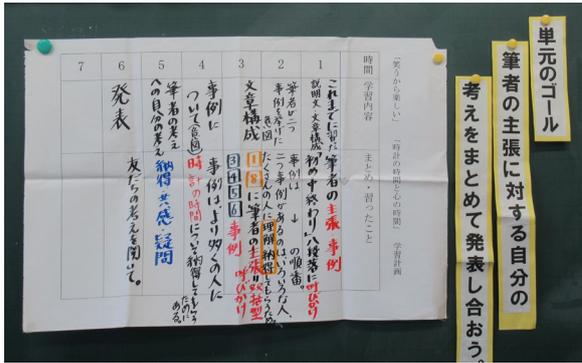
情報を整理し、説明文の読み方を児童が分かり自立して読み進めていけるようにするには、学習の積み重ねが必要である。読み方を身に付けていくために、系統性を踏まえて指導していく。教材ごとに分断される学習ではなく、学年、学習の系統性を大切にする。学級で「学習したこと」を掲示し児童自身がこれまでの学習振り返ることで、今まで学んできた多くの知識を確定・整頓し活用できるようにしていく。また、これまで学習したことと比較して、類似点や相違点を捉え、気づきを通して読みを深めていけるようにする。





## 単元のゴールを設定し共有する。

児童が学習の見通しをもって授業に臨み、主体的に学習していくためにもゴールの設定は必要である。単元を通して身に付けさせたい力を踏まえ、単元づくりの手順を通して、単元の目標からゴールを設定し情報と情報の関係を捉える授業づくりをしていく。また、つきたい力と単元の最終の活動が繋がっているゴールの設定をするとともに、児童が意欲的に取り組める言語活動を設定していく。



## 【単元作成シート】

低学年

○単元に關する学習単元

指導月	単元名
11月	「じどうしゃくらべ」

○指導事項

C読むこと

(1) ア 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。  
ウ 文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと。

○ゴールの子どもの姿

- ・2つのまとまりで構成されていて、内容につながりがある。
- ・つくりの難点を字づつ以上書いている。
- ・「そのために」を載い、「しごと」と「つくり」に整合性がある。
- ・ひらがなやカタカナ、漢字を正しく使い、文を書けている。

○言語活動

ウ 学校図書館などを利用して、図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み、分かったことなどを説明する活動。

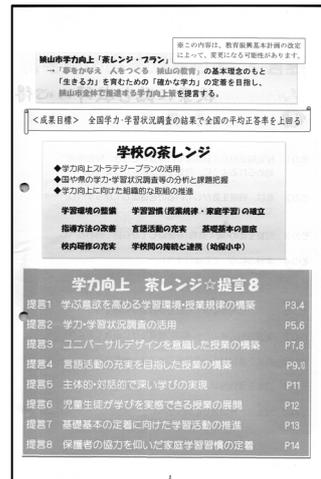
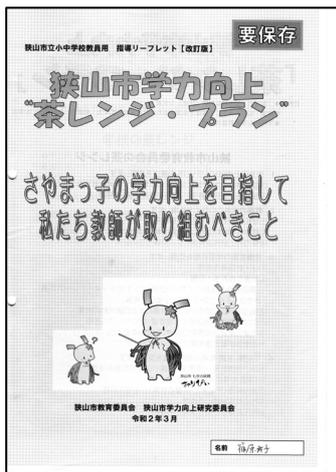
→リーフレット

○方策

ルーブリックを活用して読みで学んだ力を、書く活動に生かす。

## 狭山市学力向上“茶レンジ・プラン”を位置付ける

狭山市学力向上“茶レンジ・プラン”は令和2年3月に狭山市教育委員会・狭山市学力向上研究委員会より出されたものである。(改訂版)「基礎的・基本的な知識・技能」の定着、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力等」の育成、主体的な学習態度の育成を目的とし様々な指導法が示されている。本校でもこの茶レンジ・プランを活用し、児童が分かる授業の工夫を行っていく。



## 全文シート・本文シートを活用する

膨大な情報をわかりやすく整理し活用する力、情報同士の関係をとらえ、理解する力の重要性が高まっている。文章を構造的に捉えたり、内容を整理して捉えたりすることができるようにするため、全文シート・本文シートを活用していく。全文シートは、教材文を1枚のシートで文章全てを見通すことができるシートである。このシートを活用することによって「初め（序論）」「中（本論）」「終わり（結論）」の文章構成を視覚的に捉えることができるようにすることを目的としている。また、文と文の関係、段落と段落の関係を捉えられるようにしていく。本文シートは、本時で学習する内容に必要な部分を全文から抽出し、活用していく。本文シートを活用し、情報と情報の関係をとらえたり情報を取り出したり活用したりする力を身に付けられるようにする。

### 【全文シート】

**笑うから楽しい** 中村 真一

① 私たちの体の動きと心の動きは、密接に関係しています。例えば、私たちは悲しいときに泣く、楽しいときに笑うというように、心の動きが体の動きに表れます。しかし、それと同時に、体を動かすことで、心を動かすこともできるのです。泣くと悲しくなったり、笑うと楽しくなったりするということです。

② 私たちの脳は、体の動きを読み取って、それに合わせた心の動きを呼び起こします。ある実験で、参加者に口を横に開いて、歯が思えるようにしてもらいました。このときの顔のきは、笑っているときの表情と、とてもよく似ていました。実験の参加者は、自分たちが「笑っている」と感じていると気づいていませんでしたが、自然とゆかいな気持ちになりました。このとき、脳は表情から「今、自分は笑っている」と判断し、笑っているときの心の動き、つまり楽しい気持ちを引き起こしていたのです。

③ 表情によって呼吸が変化し、脳内の血液温度が変わるとも、私たちの心の動きを決める大切な要素の一つです。人は、脳を流れる血液の温度が低ければ、こころも感じる力が弱まっています。笑ったときの表情は、笑っているときと比べて、鼻の入り口が広がるので、多くの空気を取りこむことができ、えがおになって、たくさん空気を吸いこむと、脳を流れる血液が冷やされて、楽しい気持ちが生まれます。

④ 私たちの体とは、それぞれ別々のものではなく、深く関わり合っています。楽しいという心の動きが、えがおという体の動きに表れるのと同様に、体の動きも心の動きに動きかけるのです。何かいやなことがあったときは、「このことを思い出して、嫌の前でしっかりえがおを作ってみるのもよいかもしれません。」

### 【本文シート（1段落・8段落）】

時計の時間と心の時間

一川 誠文  
タラシロウ 絵

1 私たちは毎日、当たり前のように時間と付き合いつながりながら生活しています。みなさんも、今「時計を見ろ」と言われてはいけません。そんな身近な存在である「時間」ですが、実は、「時計の時間」と「心の時間」という、性質のちがう二つの時間があり、私たちはそれらと共に生きています。そして、私は「心の時間」に目を向けることが、時間と付き合っていくうえで、とても重要であると考えています。

2 このように考えると、生活の中で「心の時間」に目を向けることの大切さが見えてくるのではないでしょうか。さまざまな事からかえりかえり、「心の時間」の進み方が変わると知って、いけば、それを考えに入れて計画を立てられるでしょう。また、人それぞれに「心の時間」の感覚がちがうことも知って、他の人といっしょに作業するときも、たがいを気づかないながら進められるかもしれません。私たちは、二つの時間と共に生活しています。そんな私たちに必要なのは、「心の時間」を頭に入れて、「時計の時間」を道具として使うという、「時間」と付き合う、ちえなのです。

## 考えるときに活用する視点を提示する

「考えを活用する視点」は、話し合ったり自分の考えをまとめたりするときに提示する。「考えるときに使おう」は、系統性もち、学習指導要領に示された、各学年で身に付けさせたい読みの力を参考に作成した。視覚化し、視点を提示することで児童が国語の学習に関係する言葉を積極的に活用しながら既習事項として確定していけるようになる。

- 考えるときに使おう
- 同じ点（共通点）
  - 異なる点（相違点）
  - 順序
  - 考えと理由・事例
  - 全体
- （全体として言おうとしていること）
- 中心
- （その中でも中心となること）
- 原因と結果

## 情報の整理の仕方を具体的に指導する

教科書の「情報」教材は、「考えるときに使おう」、「関係をとらえよう」、「集めるときに使おう」、「調べるときに使おう」の4系統で示されている。児童が「考える筋道」を学習の中でどのように意識することができるかを考慮し、系列化されている。

### 系列1「考えるときに使おう」

考えを深め、表現するための手がかりが示されている。表やマッピングなどの思考ツールを使った情報の整理から、それを言葉で表すところまで思考の手がかりとして示されている。いつでも使える思考の手がかりとして位置づけられている。

### 系統2「関係をとらえよう」

情報同士の関係について理解を深めることで文章や話を正確に理解する力や論理的に思考するための教材となっている。

### 系統3「集めるときに使おう」

目的に応じて引用する情報活用の技能について示されている。

### 系統4「調べるときに使おう」

本や新聞、インターネットなどを適切に活用して調べたことや自分の考えを表現するときの技能について示されている。

4系統で示されている「情報」に関する教材の学習を通して思考力を高め、自分の表現に生かせるようにする。特に、系統1は教科書で思考ツールの例としてベン図やチャートが挙げられている。年間を通して、単元計画を立てるときに意図的に計画に入れたり教科を横断した学習として意識的に活用したりしていく。

## 対話的な場を設定する

学習課題に対して自己の考えを広げ、理解を深めるために一人一人が自分の考えをもてる活動を設定して学習を進めていく。対話を通じて多様な情報や考えを収集したり、自分にはない異なる考えに気づいたりしていけるようにする。また、子ども同士の協働での話し合いを手がかりに、考えることを通じ自己の考えを広げ深められるようにする。対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする活動をすることで、児童の知識・理解の質を高めることができるようにする。互いの考えを伝え合い、自分の考えや集団の考えを発展させる活動を行う。話し合いでは、話し合う内容、発達段階に応じてグループの人数を意図的に変えて取り組むようにする。



## 自分の言葉でまとめ表現するアウトプット型授業づくりのためのアンケート

研究主題「主体的に学びに向かう台小っ子の育成」～知識の理解の質を高め、確かな学力を育てる「伝え合い、学び合う」授業づくり～を目指し、授業の終末、特に振り返りの場面において、児童が本時の学習や単元全体の学習で学んだことについて、自分の言葉でまとめ、表現するアウトプット型の授業づくりに視点を定め、アンケートを作成した。このアンケートは、下記に示す2点の課題を解決する方法の手立てとして、有効だと考えられる。

### <児童の実態から>

全体的に、表現力が乏しく、書くことを苦手とする児童が多い。振り返りの場面において、「何を」「どのように」「どんな視点をもって」書かせるかを明確にし、積み重ねていくことで、書く力を高め、表現力の向上が期待できる。

### <国語科の課題として>

教材や単元ごとの指導事項、獲得させたい国語の言葉、教材や学年の系統性など、曖昧な部分が多い教科と言える。身につける資質・能力を具体化・系統化・明確化することで、生活経験との結びつきや既習事項との関連させたり、知識を汎用させたりすることを意識した指導を重ねたりしながら、学びをつなぎ、「深い学び」になることが期待できる。

### <アンケートについての内容> (例…3年生のアンケート)

		◎	○	△	▲
①	<u>国語の言葉「はじめ、中、終わり、問い、段落、筆者など」</u> を使ってまとめていますか？				
②	<u>前に学習したこと「事例の順序、終わりの書き方」</u> を生かし、学習していますか？				
③	友達の考えをきき、自分の考えや感想をもっていますか？				
④	『考えるときに使おう』を使って、自分の考えをまとめていますか？				
⑤	『考えるときに使おう』を使って、友達につたえていますか？				

アンケート①②は、仮説1を検証するためのものである。

#### <仮説1>

話や文章に含まれている情報と情報との様々な関係を適切にとらえて、思考力や判断力、表現力などをはたらかせていけば、児童の知識・理解の質を高めることができ、主体的に学びに向かう児童を育てることができるだろう。

※①②の下線部については、発達段階や学習状況を考慮し、学年・ブロックで文言を設定。

アンケート③④⑤は、仮説2を検証するためのものである。

＜仮説2＞

取り出した情報について、整理の仕方、比較・分類の仕方、メモや記録の仕方、引用などの仕方を知り、必要な語句やキーワードを適切に使って相手に伝えることができれば、授業を通しての児童の「伝え合い、学び合う」力が高まるであろう。

- 考えるときに使おう
- 同じ点（共通点）
  - 異なる点（相違点）
  - 順序
  - 考えと理由・事例
  - 全体
- （全体として言おうとしていること）  
中心
- 原因と結果  
（その中でも中心となること）

＜アンケートの実施時期＞

- 1回目…全学年 9月
  - 2回目…1.3.6年 11月上旬
- （2学期説明文の学習後）。2.4.5年 12月（授業後）

**成果と課題（ ○成果 ・ 課題 ）**

令和2・3年度の研究は、コロナ禍の中全校での授業研究、全体研修会等が制約される中ではあったが、目指す児童像を明確にして各研究部会での主題を達成するための手立ての研究、それを授業実践の中で検証するブロック部会の取り組みを工夫して行ってきた。その成果や課題としては多くの成果と課題が挙げられた。個々の児童の力を高めていくことが最も重要であることは言うまでもないが、学校研究の流れを意識した成果の共有と今後の課題への取り組みを重視しなければならない。そこで以下の5点について成果と課題を整理した。

**1 「情報と情報の関係」をとらえるための手立ての共有と資料の作成**

- 全文シートは、全文シートによって構成をとらえたり、重要語句を色分けしたり、段落の関係を色分けするなどの作業により、整理するとわかりやすくなることが分かった。高学年では、要点から要約、要旨をとらえることができるようになった。
- 「単元づくりの手順」をもとにして、児童と単元のゴールを共有して授業を計画することで教師の意図を明確にすることができた。
  - ・ 今後は全文シートだけ頼るのではなく、教材から既習事項を生かして学んだことと適切に関連付ける力を身に付けさせたい。
  - ・ 仮説に対する手立てを校内でさらに明確にして学年の系統を意識して共有することが必要である。

**2 振り返りシートを中心とした児童の知識理解を高める授業づくり**

- 授業の振り返りを毎時間同じワークシートに書き足していくことで児童の変容や振り返りの場面の表現をみとることができ、感想にとどまることなく学習内容を言語化できた。支援学級では、児童の実態に応じてシートを作成して活用できた。
  - ・ 「書くこと」による振り返りの充実をさらに図るとともに、学びが深いものになっているかを評価する

方法を明確にする必要がある。

### 3 構造と内容の把握を促し、獲得させるための資料の作成

- 文章構成図の色分けやパズルの活用を通して「個人⇒ペア」の思考が成り立ち「伝え合い、学び合う」学習ができるようになってきた。また、単元の既習内容を掲示することで、今までの学習内容を生かした授業につなげることができ、自発的な学習につなげることができた。
- ・学習環境を整えるために関連本・資料の充実を一層図る必要がある。

### 4 読み取った内容を理解し、表現するための策の明確化

- 「必要な情報」と「必要でない情報」を見分けるために、余分な情報を入れることで精査の精度を上げられることが分かった。
- ・事例を動作化して内容を把握するのは、有効な手立てであるが言葉による見方を働かせる展開の工夫も必要である。
- ・「必要な情報」を明確にするために「必要のない情報」を限定して活用することも必要である。
- ・まとめの場面で、自分の言葉で表現できる児童を増やしていきたい。

### 5 発言による「伝え合い、学び合う力」を向上させるための調査・振り返りシートの活用読み取った内容を理解し、表現するための策の明確化

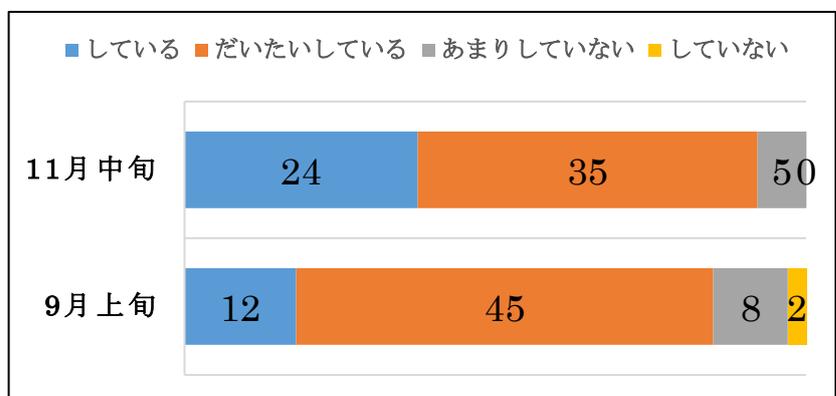
- 「考えるときに使おう」の活用や振り返りに国語の用語（はじめ、なか、おわり、作者の主張、根拠、事例、要点 など）を意識、活用できるように支援することで児童の「伝え合い、学び合う力」の向上が図れた。また、アンケート調査を行うことにより、課題への取り組み方の定着や自分の考えをはっきりさせることに効果があり、学習を深めることができた。アンケートの結果から以下の成果が分かり、課題が明確になった。

＜アンケートの結果例 6年＞（グラフ内の数は人数）

- ①「国語の言葉『はじめ、中、終わり、問い、段落、筆者など』を使ってまとめていますか？」から○学習用語を適切に使うことは、児童の共通理解が成り立っていることの上で可能となる。このこと

は、授業の深まりを促すばかりでなく、思考の時間を生み出し、「書く」時間や「話す内容を考える」時間を生み出すことにつながる。

- ・学習用語の定着や用語のさす内容の共通理解をさらに深め、話し合いの質と伝えあう場面の広がりや伝え合う場面の活性化につなげたい。



- ②「前に学習したこと『事例の順序、終わりの書き方』を生かし、学習していますか？」から○学習の積み重ねを意識する児童が増えてきている。これは、

ア) 振り返りシート」の活用  
イ) 既習事項を生かした問題  
化帰結の場の設定

ウ) 見通しを持たせる板書の  
工夫

などの取り組みの成果と言う  
ことができる。

- 単元のゴールを設定する取組  
は、単元の学習内容を見通し  
て提示する積み重ねが重要で

あるため、各学年での取り組みを系統的に深めていくことが次学年の取り組みを深めることにつ  
ながる。学年間の繋がりを大切にすることが課題である。

### ③「友達の考えをきき、自分の考えや感想をもっていますか？」について

○振り返りの視点を明確にした

「振り返りシート」を単元を  
通して活用することで、自分  
の考えを明確にすることがで  
きた。その結果、自分につい  
た読みの力を明確にすること  
ができた。また、単元のゴール  
を設定して授業に臨んでい  
る指導者も児童の考えとずれ  
がないか確認することにつな  
がった。

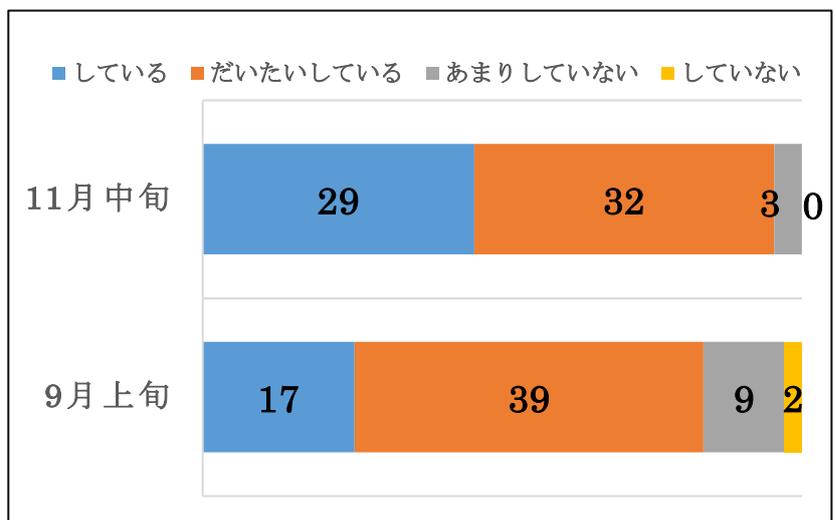
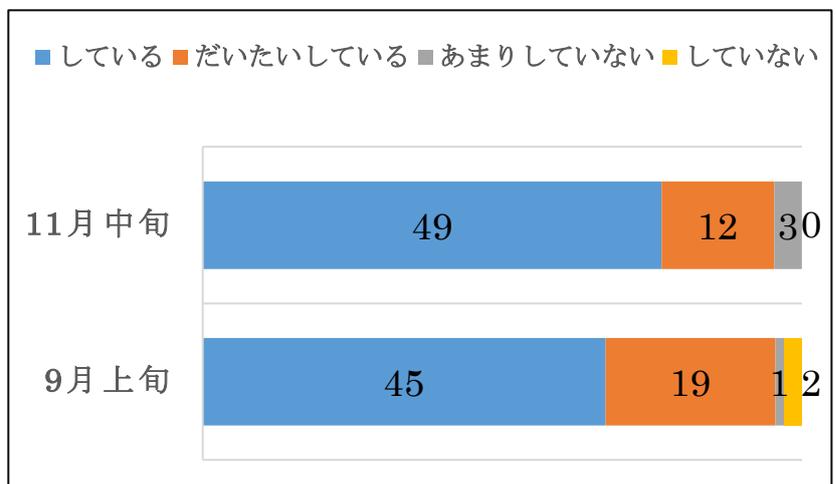
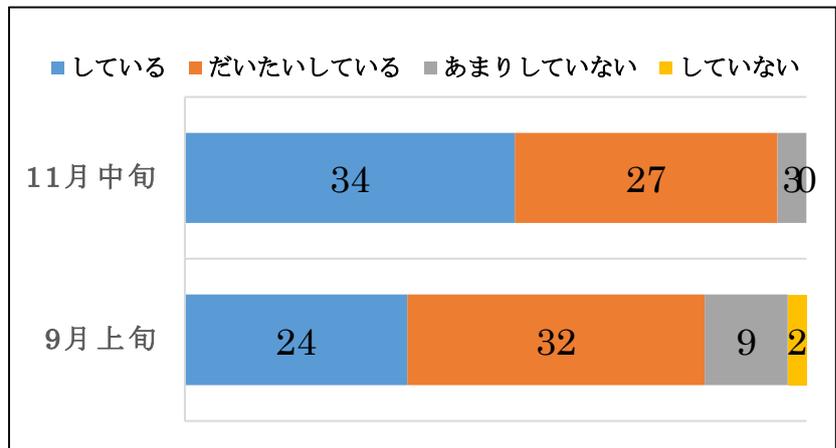
- 自分の感想を持つことは、対話的な学習が欠かせない。交流の場を意図的に設定することと直接話す  
場を設けなくても教師に支援を介して情報を共有することでも感想を深めることができるので、さま  
ざまな場を設けて児童の気づきを深める必要がある。

### ④「『考えるときに使おう』を使って、自分の考えをまとめていますか？」について

○「考えるときに使おう」「関係  
をとらえよう」「集めるときに  
使おう」「調べるときに使お  
う」の4つの系統を示し、視覚  
でとらえられるようにしたこ  
とで年間を通して、全単元や  
他教科での学習に情報の整理  
の仕方で学んだことが生かせ  
るようになってきた。

- 情報の整理の仕方は、「教科の  
学び方」と大いにかかわりが  
あるので、それぞれの教科で

の取り組みも大切に、教科との関連を通して横断的な取り組みを進めていく必要がある。



⑤ 『考えるときに使おう』を使って、友達につたえていますか?』について

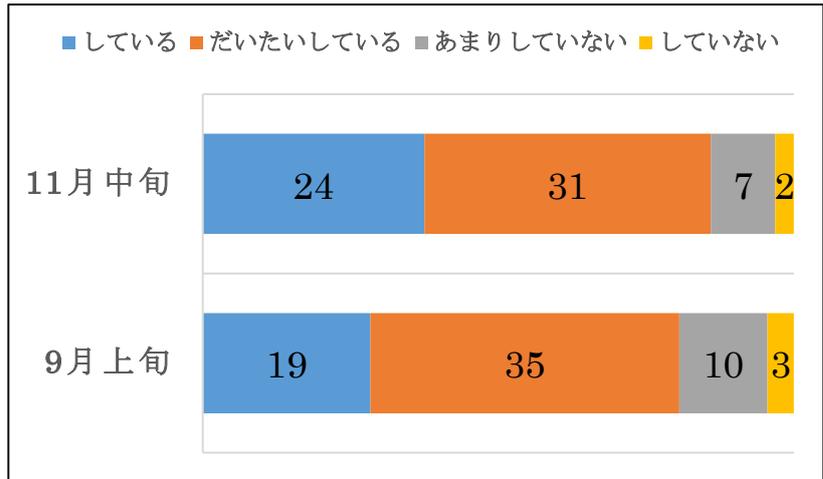
○「考えるときに使おう」を思考

の手掛かりとしたことで、自己の考えを広げる場を設けることができ、考えの広がりや質を高めることができ、自分の考えと他の児童との共通点やちがいをめいかくにでき、自分の考えに自信をもって伝えることができる児童が増えてきた。

伝える場は、低学年では1～2名、中学年は1～3名、高学

年は場面によっては3名以上の場や、自分のノートを見せ合う場など多様な場を用意することができたことも大きい。

- 学習ツールを活用する力は、児童の対話的な活動が大きな効果を生むので、積極的にツールを活用する場を設定する指導内容を設定していくことに合わせて、活用を促す支援が一層必要である。



## 各研究部の参考文献

- 沼田拓弥「『立体型板書』でつくる国語の授業（説明文）」東洋館出版社 2021年
- 黒田陽一仲井文之「教材を正しく読み取る低学年の音読指導」  
<https://www.tuins.ac.jp/common/docs/library/2019kodomo-PDF/201903-05kuroda.pdf>
- 文部科学省答申「国語力を身に付けるための国語教育の在り方」
- 土井正博「音読指導法—学習活動アイデア&指導技術」明治図書出版 2021年
- 子どもと創る「国語の授業 No70」 全国国語授業研究会 筑波大学附属小学校国語研究部 東洋館出版 2020年
- 光村図書「光村の『国語』完全活用ガイド 思考力をはぐくむ『情報』教材」2020年 しょうさい